

ゲーテのシュテラについて

| | |
|-----|---|
| 著者 | 長沼 敏夫 |
| 雑誌名 | 東北ドイツ文学研究 |
| 巻 | 9 |
| ページ | 29-45 |
| 発行年 | 1965 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/00133480 |

ゲーテのシュテラについて

長 沼 敏 夫

I

動かすことのできない過去についての告白から大部分がなり、その告白によって示される過去の行為が、同時点に凝集されることによって、その矛盾が明らかとなり、解決不能となった舞台が、登場人物の一人が考え方を变えることによって、一挙に解決されてしまう、作品シュテラとはそういう戯曲である。この、舞台に解決を与える考え方を分析して、作者の制作の内面的な動機を明らかにすることが、本稿の主題である。以下作品を分析して問題点を明らかにする。

第一幕。舞台は駅馬車の発着所。ここは宿屋も兼ねている。駅馬車でツェツィーリエとルーツィエの母娘が到着する。出迎える女主人は、一人できりもりしている、いわば男まさりの女。娘は馭者にたいしても、宿屋の従僕、女主人にたいしても、わけへだてがない。母親の方は、夫に捨てられたという過去を持っている。そして今、ここに住んでいるシュテラのところにお相手にあげるために、娘を連れて来た。目に映るすべてのものが、夫と共にいた頃のことを、彼女に思い出させる。娘は、もうそれは忘れるべき時期だというが、母親にとっては、取り返しのつかない事は忘れることはできない。宿屋の女主人もやはり夫に先立たれた。しかし彼女はお祈りなどしている閑はないという。彼女からシュテラについての噂を聞く。シュテラも夫に見捨てられたのだが、シュテラ達夫婦が誰であったのか、誰も知らない。夫に見捨てられた悲しみから、今は一人で引きこもってしまい、僅か

に近所の娘達に、いろいろな仕事を教えているだけである。あのよう善良で親切であるシュテラが、どうして不幸になったのかわからないといわれる。そしてルーツィエもシュテラのところに挨拶にいつて、噂が間違っていなかったと思う。その間にフェルナンドが士官の服装で着く。彼は通りがかりにちょっと立寄っただけのようである。彼はシュテラの屋敷を見渡して、自分がまだ彼女に受入れて貰えるだろうかと考える。宿屋の女主人のいう、シュテラの夫が、彼であるのだ。そして彼の心がシュテラに許して貰えそうだと思っても、すぐに彼女のところに行く決心をすることはできない。また彼女のところに行くためには、自分のかつて見捨てた妻の幻影も追い払わなければいけない。それでやはり、シュテラの許に行く決心をすることができない。彼は宿屋の女主人からも、シュテラが、失踪した夫を今なおいかに愛しているかを聞く。フェルナンドはシュテラのところから帰って来たルーツィエと一緒に食事をする。彼女は、父はアメリカに行くために彼女達母娘を見捨てたと、偽りの経歴を述べるのだが、父との離別に関して冷淡であり得るのは、父が彼女に何もしてくれなかったからである。そしてそれは父にとって、自由の方が大切だったからであり、人間にとって自由は最も大切なものだと思ふ。その父にすべてを捧げ、見捨てられ、悲しみのあまり死にそうな母のようにルーツィエはなりたくない。そして今自由を大切にできるのも、結局は取り返しのつかない過去の記憶を彼女は持っていない、すなわち縛りつけられるべき過去を持っていないからだと思ふ。この自由の意識は、彼を驚かす。

ツェツィーリエ、シュテラ、フェルナンドは、それぞれ過去によって現在が縛りつけられている人間である。ツェツィーリエ、シュテラはかつて自分を見捨てていった男との愛の記憶によって呪縛されているようである。フェルナンドは、眼前のシュテラと、かつて見捨てた妻との間で、どちらを選ぶか、決断することができない。それにたいして、宿屋の女主人

は、現在のことのみに関心を集めているようである。ルーツィエは、関りあうべき過去を持っていない。

第二幕。シュテラがルーツィエの来るのを待ち焦れている。彼女の心を満たすために、かつてはたった一つのもので充分であった。たった一つのもの、すなわちフェルナンドは彼女を見捨てた。しかし彼と共にいた頃のことは、取り返すことができないこととして、今でも生活の中心におかれている。それは恋の最初の日々の男女の融合感として記憶され、この点で二人の女の感情は一致する。そしてこれはツェツィーリエによって、「最も若い、最も美しい人間性の感情」と呼ばれる。等しくこの感情を記憶として持ち、等しく男に裏切られながら、シュテラは、その男を非難しようとはしない。しかしツェツィーリエは、「あの情熱の瞬間には、彼等は自分に嘘をついているのです。どうして私達が欺かれないはずがありませんか。」という。シュテラにとっては裏切られても尚その男が愛の対象であるのにたいし、ツェツィーリエには、裏切られたことによって、男への批判の目が開かれているのである。しかし男の背信を経験しているという共通の感情から、互いに男の役割を果そう、そして一緒に暮そうとシュテラが提案する。それは彼女が、孤独を最も怖れていることから来るのである。彼女によれば、娘達を集めて仕事を教えているのは、まさに孤独を避けるためであった。ツェツィーリエによれば、仕事に追われることは、不幸な恋をした心に取り返しをつけるものであると見做されるが、シュテラにとっては、それは取りつくろいにすぎず、何物によっても失われた恋は取り返すことはできないのである。更に彼女は、子供までも死によって奪われてしまった。この取り返しのつかないとされる恋の相手の肖像画を、シュテラは彼女達に示す。ルーツィエはこの人は食事を共にした人とそっくりだという。シュテラはすっかり取り乱し、すぐに迎えにやる。ツェツィーリエは肖像画から、それが自分の夫であることを知る。そしてここを

立ち去る決心をする。

第三幕。シュテラからの迎えでやって来たフェルナンドとシュテラ。シュテラは彼が帰って来たので夢中になっている。彼はツェツィーリエのことを忘れたかのように、「愛と永続的な誠実が、ここでは干からびた浮浪人を縛りつけるだろう。」といって、シュテラの唇から愛のあかしを吸い込んでいる。そこに従僕が来て、ツェツィーリエ母娘の出発を告げる。シュテラは、今フェルナンドを得たので、ツェツィーリエ母娘の意にまかせてもよいということをフェルナンドに託して、退場する。一人になった彼は、彼女の許で得た、さっぱりとした感じと、心が思うままになることをたのしんでいる。心の片隅に現れた不安——おそらくは見捨てた妻に関する——を無理に払いのけながら、シュテラ以外の姿は心の中から消え去ったと思いこむ。そこに執事が登場する。彼はフェルナンドの過去の愚行の共犯者と呼ばれる。彼との対話からフェルナンドの過去が明らかにされる。フェルナンドによれば、彼がシュテラの許を去ったのは、前に見捨てた妻と娘を探すためであった。「確かな情報から」ツェツィーリエは悪い商人に欺かれて、財産をなくしてしまい、町を去って、その後行方がわからなくなってしまったことを知った。そしておそらくは自分と自分の娘の手仕事で、なんとか生計をたてているのだろうと思う。「お前も知っているように、そんなことはしてのける勇氣と氣骨をもっているからな。」執事は、「ちっとも変りばえのしない」遍歴を半ば揶揄しながら、フェルナンドの昔を回想する。ツェツィーリエを可愛いと思い、よく押しかけたこと、彼女は女の子を産んだが、それと共に彼女の魅力も失われたこと。あちこち見廻して、シュテラに出会ったこと。どちらかを選ばなければならなくなり、財産を処分して、シュテラを奪い出したこと。その頃彼女は、自分自身についても世の中についても何も知らない子供にすぎなかったことなど。執事によれば、フェルナンドがシュテラから去っていったのも、

妻子を探すためか、あるいは「かくされた不安」からか、わからないとされる。そこにツェツィーリエが現れる。彼女はゾムマー夫人と名を変えているが、一目見ただけで、フェルナンドは、それが誰であるかを覚る。

「心よ……なぜお前は過去を許す力を持ってはいないのだ。」と彼は傍白する。二言三言言葉をかわすうちに、フェルナンドは耐えられなくなって退場する。それによってツェツィーリエは、彼が自分を認めたのだと思う。そして彼女は独白する。「神様、この瞬間に私の心に充分の強さを与えてくださったことを感謝いたします。……この重大な時に、こうも落ちつき、こうも大胆でいられるとは。」今立ち去る理由を述べるなら、それは彼女の過去を述べることであり、それはフェルナンドへの非難となる。それでいて彼女は取り乱さないという自信を持ったという。彼女は話しはじめる。かつてまだ一人でいた頃、将来の喜びとなやみを予感すると、世の中を共に歩んでくれるべき夫を求めた。潑刺とした精神が心の誠実と結びついている人を見つけ、その人に愛を捧げた。しかしやがて男は彼女の愛よりも多くのものを必要とするようになった。それにたいして彼女は非難をかくさなかった。彼は彼女を見捨てた。彼女からすべての希望が失われた。しかし彼女を捨てたのは、その男の罪ではないと彼女はいう。男と女は何の共通点もない世界に住んでいる。女の世界に男が現れたということは、男が自分を欺しているにすぎない。たゞ男の目が覚めた時、哀れなのは女である。これはツェツィーリエが男性を女性から峻別することによって、意識的にフェルナンドとの関係を断ち、自分の精神の平衡を保とうとすることではないか。そしてこれが先に、強さと大胆として意識されたものではないだろうか。しかし、フェルナンドが、その男は自分のことだと告白すると、この強さは一遍に動揺してしまうが、彼女はシュテラを知っている以上、フェルナンドに縋ることはできない。またシュテラのように捨てられてもひたすら献身することもできない。そこで彼女は、こ

の出会いの瞬間に思う存分泣けば「強く」なれるし、そうになったら自分を永遠に捨ててもいいという。そしてこの世では彼をシュテラから奪うことはできない以上、この世ではないところで彼との再会を期待するほかはない。これに反してフェルナンドは、シュテラが存在を忘れたように、ツェツィーリエを抱きしめていう。シュテラの許では休息も喜びも見つけられず、すべてのものが妻と娘を思い出させた。彼女達を探しに出たが無駄だった。そして自分にも人生にもうんざりして、傭兵になった。除隊の後、「長くて奇妙な迷い」を経て、今こうして彼女を抱いているのだと。

執事によれば、フェルナンドがツェツィーリエを見捨てたのは、彼女が出産の後、魅力を失った頃のことであった。これは彼女によれば、主婦として心も愛も荒んでしまった彼女の愛以上のものを彼が必要としたからであった。また執事によれば、フェルナンドがシュテラを見捨てたのは、ツェツィーリエ母娘を探すためか、かくされた不安のためかわからない。またフェルナンドによれば、シュテラの許には休息も喜びもなかったとされる。ここに指摘されたいいくつかのことは、しかし、状況の説明ではあり得ても、原因を説明するものでは必ずしもない。明瞭なことは、自分の力で生きていく勇氣と氣骨のあるツェツィーリエから、自分自身のことも世の中のことも何も知らないシュテラのところに、愛の対象が移り、そこでツェツィーリエを思い出して、シュテラを見捨てた、ということだけであろう。そしてツェツィーリエを見つけることができなかった時、フェルナンドは、自分にも人生にもうんざりしてしまい、軍隊に入ったという。そこからなぜ出て来たのか、先の倦怠感はどうなったのか、それは説明されない。そして彼は軍服姿のまま、シュテラの住んでいる場所に立ち寄ったのである。そしてシュテラの前に現れ得たのは、彼女からの迎えがあったからであり、ツェツィーリエにあえたのは、シュテラに用事を頼まれてであるとするれば、フェルナンドの一連の行為に、主体的な意志による決断が存

在していたとはいえないのではないか。

フェルナンドはツェツィーリエのもはやこの世ではないところでしかあうことはできないという考えに同意することはできないという。ではシュテラはどうするのだという質問に、再びシュテラを欺いて、二人で、ここから逃げ出そうという。ツェツィーリエはこの考えの分別のなさに驚くが、彼がせきたてるので、娘と共に退場する。一人になった彼の独白がそれに続く。逃げ出すといってもあてはない。解決は短刀しかない。こう考えながら、彼はツェツィーリエを発見するのがもう少し早ければ、シュテラに会わなくて済んだのに、と悔いている。そして今一番必要なのは無感覚だと思ふ。

シュテラの許に受け入れられた彼は、はればれとした、心の思うままになる自分を感じた。ところがツェツィーリエにあらうと、シュテラを欺いて逃げ出そうと思う。ここにも彼の主体性のないことが示される。

第四幕。ツェツィーリエを避けたシュテラは庭園の中で、フェルナンドとの再会の喜びに浸っている。そこに再びシュテラを欺くために、彼が現れる。それとも知らない彼女は、彼の首に縋って、二人の結びつきを回想する。すなわち彼女の生活を内的に支えて来た、恋の初めの時のことである。また結婚のために、文字通りすべてを捨てたこと、そして彼女がこの世の大地を踏みしめたのは、彼の愛を知ったのと同時であることである。彼は別れを告げることができない。そこに馬車の用意ができたという知らせがくる。シュテラは彼も一緒に行くことを聞いて狼狽する。シュテラを欺すことはできなくなったが、別れを告げる機会は与えられた。そこで彼はツェツィーリエとの関係、そしてシュテラと別れる決心を告げる。シュテラは失神する。彼の助けを求める声に応じて登場するのはツェツィーリエ母娘である。ツェツィーリエはこのシュテラを見て、恨むことはできない。やがてシュテラは、混乱と苦悩に満たされて、逃げ出す。ツェツィー

リエは、この混乱と惨めさを救うために、「強く」なろうとする。

第五幕。私室でのシュテラは混乱を極めているが、フェルナンドへの恨みは恨みにはなり得ず、相変らず続く彼への愛のために、絶望的となる。彼女は今、何も考えないでいられたらということだけを願う。

広間でも同じくフェルナンドが混乱を極めている。この関係を、彼のために惨めになり、彼がいなくても惨めになる三人の女と述べる。彼は彼女達が彼の全部を要求するのだと歎く。そして自分は、という質問に彼は答え得ない。そしてピストルを取りあげた時、ツェツィーリエが事態を収拾するために現れる。彼女は今は「強く」なっている。そして利己的ではない、愛のためにすべてを犠牲にする恋人の情熱でもない、愛のために愛そのものをも犠牲にできる妻の感情で解決しようと思う。そしてその具体的な方法は、彼女は娘と共に彼とはなれて暮すこと、彼と彼女の間に許されるのは手紙だけ、そして彼はシュテラと生活することである。これは要するにツェツィーリエが諦めることであり、我慢することであり、待つことである。フェルナンドにしてみれば、自分の愛における動揺を、現世において肯定されたことである。しかしフェルナンドはそれを受け入れられぬという。しかしシュテラはどうするのかという問いには答えられず、死を選ぼうとする。ツェツィーリエはそこである物語を例えとして、男にとって必要な女は、その男の妻は受け入れるのが「人間性」のあることだと説明する。そして理解できなくても、感じているこの解決法に従うことをシュテラにすすめ、こうして二人の女は一人の夫を共有することになる。

問題を整理してみると、フェルナンドは、自分の主体性の欠如から、二人の女性と結婚してしまった。彼にとって問題の解決は自殺しかなく、シュテラは逃げ出そうとするが、一人の男のためにすべてを犠牲にしまった彼女は、一人で生きていく力はなさそうである。この二人を救うために、ツェツィーリエは強くなった。この強さを持って彼女は、彼の感情の

動揺を容認する決意をする。この決意によって、問題は解決されたといえる。そしてこの決意の結果、主体性の欠けたフェルナンドは、自己の動揺する欲求が認められ、またそれを満足させ得ることになる。

II

作品シュテラは 1775 年に書かれた。ヴェツラルから父の家に帰り、一応は弁護士としての職務につき、一方作家としては、『クラヴィーゴ』『フアオスト』『新しい恋、新しい生』などを書き、ラヴァーターの観相術についての著作への援助も続けた。また『若いヴェールターのなやみ』の出版にからむケストナー夫妻との不和も 1774 年末には消えようとしていた。1775 年 2 月以来のリリーとの関係は一度婚約にまで進みながらも、ついに結婚できなかった。ゲーテが後になって回顧しているように、「ぼくの人生における最も散慢な、最も混乱した、最も完全な、最も充実した、最も空虚な、最も強壯で、最も柔弱な九ヶ月」(1775 年 10 月 18 日ビュルガー宛)が、実は作品シュテラを産みだす母胎であったわけである。今この時期を検討することによって、制作を支配した、基本的な作者の意識構造を明らかにしたいと思う。

ケストナー夫妻との不和(1774 年 10 月)から、ゲーテがフランクフルトを立ち去る 1775 年 10 月までの間、彼の感情に共通して指摘できることは、対象との共鳴、連帯性、同調性ともいわれるべき傾向である。行動はたいてい受身の形で記述される。そしてこの感情の現れ方からこの時期をさらに分類すると、1775 年 1 月迄の、周囲との同調がうまくいっていた時期、それに続いて 5 月初めまで、リリーと婚約の後、リリーに完全に同調した結果、自我の喪失の危機に見舞われ、さらにその結果生じた混乱と不安の時期、そして最後に、ゲーテが故郷を立ち去る 10 月までの、いかにして同調的感情から自己の主体性を確保し得るかが問題となる時期、以上

三つの時期にわけることができる。

そして第一期と第二期での同調的感情の中から、作品シュテラにおけるツェツィーリエの「我慢すること」「そのために強くなること」が主張され、第二期第三期の主体性をなんとかして確保しようとする感情の中から、作品シュテラにおけるフェルナンドの、動揺する感情を他に認めさせることによって確保される自我が主張されると考えられるのである。以下これについて説明を加えたいと思う。

ヴェールターを出版したことは、ケストナー夫妻をひどく怒らせた。しかしこの怒りにゲーテは責任を感じてはいない。「起ってしまったことだ。……できるならばくを許してくれ。」と一応は謝まるが、作品を純粋に読めば、その怒りは根拠のないものであることがわかり、また運命はこの作品によってゲーテとケストナーとを一層緊密に結びつけようとしたのだと主張して、作品にも作者にも罪はないと考える。こうした状況認識から、両者の不和の解決法は「この事件で、何が起ころうとも、変らないでくれ。変らないで。まったくケストナーはすべてを最善なものに転ずるといわれているではないか。」というのであって、ゲーテのために生じた不和を、ケストナーの忍耐によって、和解させようとするのである。(以上、1774年10月ケストナー宛のゲーテの手紙から) このゲーテの希望はケストナーによってかなえられた。ゲーテにとっては、このケストナーの態度はむしろ当然である。そして繰り返し「君が待っていてくれれば、君も助かるのだ。」「君が我慢してくれれば、君の心配、君の不平は……消えてなくなるのだ。」と書く。(以上、1774年11月21日ケストナー宛) このように不和を、相手に忍耐を要求することによって解決しようとする態度は相手との動かし難い連帯感情を前提としていなければならないのではないだろうか。

そして周囲のものと自分を、あるいは周囲の者同士を、互いに共感融和

した状況に導こうとすることは、この当時いろいろな形をとってゲーテに現れていたのである。そして友人同士の誤解を解いてやって、「およそ世間とは、こうしたもので、このような事件を和解させるのには、ぼくはすぐれた腕を持っています。」(1774年12月ラ・ロシュ宛)と書いたり、「ぼくがもう誰とも誤解しなくなり出したのは、何だか呪わしいことです。」(同上)と書いたりするのである。二年間の沈黙の後ヘルダーとの和解が成立って、新しい生活を互いに始めようといったのもこの頃のことであった。(1775年1月18日ヘルダー宛)

この時期を最も特徴的に表現するのは、伯爵令嬢アウグステ・ツー・シュトルベルク(以下グストヒェンと書く)に宛てた手紙であろう。ヴェーホルターに感激して、その著者に手紙を寄せた時、彼女は自分の名を記さなかった。しかしその手紙を受け取ったゲーテは、匿名の差出人にたいして、「直接の感情」を感じ、二人の間には「無限者の像」が盛りあがって来て、共通の感情が醸成されていると思い、兄弟を発見したと考える。あなたは幸福かという質問にたいし、「幸福です。仮にそうでないにしても、ぼくの心の中には少くとも喜びとなやみの深い感情が住んでいます。ぼくの外にあるもので、ぼくを妨げたり、苦しめ邪魔したりするものは何もありません。」と答える。(以上、1715年1月18-30日頃グストヒェン宛)これはゲーテの感情が欲びにも悩みにも開かれていること、すなわち対象に従って、深く共鳴できる柔軟さを持ち合わせていることを述べたものであろう。こうした同調的感情には、それに逆らうものはないのである。

このような時期にゲーテは、裕福な銀行家の娘リリーと知りあった。ゲーテにとっては未知の世界に属する銀行家の家庭の娘、他方ゲーテは、ヴェーホルター、ゲッツによって成功をおさめた新進の作家家であるといえ「まだ濃いスープは飲めない」(1774年12月23日ラ・ロシュ宛)時であ

った。しかしリリーを取りまく、いわゆる社交界との異和感にもかかわらず、ゲーテはたちまちのうちに、二つの美しい目、可愛いブロンドの娘の虜になってしまう。こうして自ら「謝肉祭のゲーテ」と呼ぶゲーテが生まれたわけであるが、これと同時に、もう一人のゲーテも生まれていた。そのゲーテは灰色の服に身を固め、広い世界がやがて開かれるのを予感し、常に自分の中に生き、努力し、仕事をしながら、階段を一つづつ登り、理想に飛びつこうとはせず、たゞの気分を実践できる力に展開させようとするのである（以上、1775年2月13日グストヒェン宛）。そしてこの後は、いわばリリーに振り廻されるゲーテを、自分の中に生きるゲーテが、いかに抑制するかということを問題にして、ゲーテの生は進んでいくように見える。しかし結局は抑制することはできなかった。そのため、自分自身の中に生きようとするゲーテは、自己確保のために、他に救助を求めなければならなくなる。この時期のゲーテの手紙には、リリーへの共感同調と、まさにそのために救助を求める叫びとが交錯し、彼の感情は全く混乱を極めていく。

生活は耐え難く、勤勉なのは感覚的な仕事においてのみであり、将来の望みも薄れてしまうようであるが（1775年3月J. フェールマー宛）、それでもリリーは可愛らしく、尊いものである（1775年3月5日J. フェールマー宛）。リリーと彼女の母と散歩に出る。そのことがまた自分を愚かで気狂いのようなだと思わせる（1775年3月6日J. フェールマー宛）。頭は極度に緊張し、休息をのぞむ声もでてくるが（1775年3月7日グストヒェン宛）、すぐに一転して頭は晴れやかに心は自由であるを感じる（1775年3月10日グストヒェン宛）。自分の生活をスケートにたとえ（1775年3月21日F. ヤコービ宛）、確乎たる生活意識が欠けていることを感じ、孤独の感を深め、弁護士としての仕事も気が進まず、将来の悲哀の時を予測して、その時の救済を頼んでいたりする（1775年3月25日グス

トヒェン宛)。この頃ついに彼はリリーと婚約を結ぶ。「一つの混乱から他の混乱に陥り、この哀れな心をもって、思いがけずまた人間の運命に関わっています。」(1775年4月14日クネーベル宛)「思いもよらず」という表現を使っているように、婚約に際しても、それを自分の意志として認めることはためらわれるのである。「運命の意志行われよ。」(1775年4月15日クロブシュトック宛)と叫ぶ時、自己の確保を諦めたかのようである。

ちょうどこの当時、F. ヤコービは J. ファールマー及び B. v. クレルモントと二重の恋愛関係にあった。この関係はゲーテを包んでいた社会の慣習に従えば、ヤコービは意志的にこれを抑制しなければならなかった。ゲーテはこれをどう見ていたのであろうか。ファールマーに作品シュテラの最初の1ボーゲンを送って後、ゲーテは「第五幕をという御要望をお抑えになりましたか。あなたがつけ加えてくださればと思いますか。」(1775年3月 J. ファールマー宛)と書き送った。彼女が現実にはどのような解決を与えるか、期待していたのもあろうが、この時ゲーテは、シュテラ問題の解決は不可能と考えていたのであった(1775年4月 J. ファールマー宛)。先にファールマーに、シュテラの第五幕を実践で示してくれと頼んだ手紙の中で、ゲーテはこうもいっている。「私は人間という私達の種族の運命を歎くことに疲れていますが、それでも私は人間を描こうと思いません。彼等は自分自身のことを認識しなければなりません。もしできるなら、私が彼等を認識したように。そして彼等は不安の中にあって、より落着きはしなくとも、より強くなければならぬのです。」こう見てくると、ゲーテはヤコービ問題の解決にあたって、ファールマーに強くなることを決意させようとするのであろうか。

リリーとの婚約の後も、ゲーテの緊張と紛糾は続く。そしてこの解決は自力では不可能のようである。他に救助を求めざるを得ない(1775年4月

J. ファールマー宛)。しかし過度の緊張があるいはリリーの前で爆発したのだろうか (詩, リリーの公園 63 行以下参照), リリーとの関係にひびきはいったとゲーテは意識せざるを得なくなった。すなわち, 「不快なやり方で, 再び海中に投げ込まれてしまった」 (1775 年 5 月 12 日頃 ヘルダー宛) のである。こうして, 「家庭の至福という港」「この世での真の悲しみと喜びにおける確乎とした足場」から遠のいてしまったと感じないわけにはいかない。(同上) 「思いもかけずに」結びつき, そこから「投げ込まれて」しまうというように, すべてが受身でしか感じられないと, やがては「生れながらの運命と呼ばれる針金の上で, 一生を踊り散らしてしまうのだ。」 (1775 年 5 月 12 日頃ヘルダー宛) と自己規制を全く諦めた姿勢にもなり得るのである。

リリーに見捨てられたと思って, その孤独感から逃れるためであろうか, ゲーテは機会が現れるとすぐにフランクフルトをはなれた (いわゆる第一次スイス旅行, 1775 年 5 月 14 日—7 月 22 日)。環境の変化は彼にどのような影響をもたらしたであろうか。自然と向いあうことによって, 「自由を感じています。」 (1775 年 5 月 24 日 J. ファールマー宛) と叫んでも, それは結局, リリーにたいしてついに自己規制のできなかった状態から, リリーがいなくなったただけなので, いわば消極的な意味での自由にすぎない。だからたとい旅程を延ばそうとも (1775 年 6 月 5 日 J. ファールマー宛), 彼女の幻影は執拗に追いかけてくる (詩, リリーに)。そしてついに彼は同行者と別れて帰途につく。リリー問題に関する限り, この旅行は失敗であった。相変らず鸚鵡のように束縛されているのを感じる (1775 年 8 月 3 日グストヒェン宛)。そして心の中の苦しみがきわめて大きくなると, 「ぼくは叫び出す, ……しっかりしろ, しっかりしろ。我慢し通せばどうにかなっていくだろう。……ぼくたちを我慢してくれ。……君のやさしい

手でこの額を拭ってくれ。そして力強い言葉を一言。そうしたらぼくたちは立直れるのだ。」(1775年8月3日グストヒェン宛)、しかしこの混乱、無感覚、孤独にはついに耐えることはできない。そしていつれへか脱出を試みようとする(1775年8月3日グストヒェン宛)。そして金銭の準備をはじめ、また父を説き伏せることも頼む(1775年8月8日頃メルク宛)。リリーと共にいることが自己崩壊につながり、それを自分ではどうしようもないという意識から他に救いを求めるのであったが、脱出しようとすることも、この意識から生れたものである。そして脱出とは過去を否定し、無価値と認めることとなるのであるが、それは同時にリリーへの背信でもある(1775年8月17日A.L.カルシュ宛)。これにリリーとの感情的な行き違いが(1775年8月末、ラエール・ドルヴィール宛)加わってくると、彼女との関係が義務として続けられるようにもなる(1775年9月14日グストヒェン宛)。しかしある朝「気分が軽くなり、ぼくは救われ、ぼくはまだ何かになるにちがいないという確信が与えられ」と「ぼくたちは互いに永遠の生命に希望をつなぐのはよそう。この世でぼくたちは幸福でなければならぬ。」(1775年9月16日グストヒェン宛)と、リリーへの裏切りを正当化するような発言が生み出される。しかし状況が変わり、感情が暗くなると、リリーが冷淡になった時を想像して、戦慄したり(1775年9月18日グストヒェン宛)、また「ぼくは哀れな、さまよえる、だめな男だ。」(同上)と絶望的になり、ついには、世界をも人の心をも理解できなくなってしまう(1775年9月28日ラヴァーター宛)。

10月の初め、彼はヴァイマルに招かれた。結果的にはこれが、彼をリリーから離れさせる決定的な役割を果たしたのである。しかし彼はこの招待に応ずることによって、不安と紛糾が除去されると思わなかった(1775年10月18日ビュルガー宛)。しかし彼にとって現在の問題が、リリーに流されてしまう自我を何とかして取り戻すことにあるとしたら、この招待は救

い手として映ったにちがいない。彼はこの世で幸福であるためには、リリーなどに関りあってはいられないのである。救い手の腕の中で彼はリリーに別れの言葉を記す。「我々は割り当てられた役を最後まで演じなければいけない。」(1775年10月30日旅日記) 与えられた機会を利用することによってかろうじてリリーから脱すことのできたゲーテは、それを各自に割り当てられた役割であると説明することによって、その脱出を正当化しようとしているように見える。

こうしてゲーテは最後まで自分の意志を主体的に確立することはできなかった。流される自我が現実存在し、それを前提として、それを否定するところに真の自我の存在を想定して、それを確保しようとして躍起になるが、ついにできず、他に救助を求めた。これがこの時期のゲーテ像ではないだろうか。

そして流されてしまう自我を救ってやるためには、周囲の人々が我慢をし、変らないで待っていきやうだけの強さを持つべきだと主張しながら、流されてしまうその人は、機会を掴んだら、永遠の生命を否定して、すなわち我慢しないで、それを割り当てられた役として、自己の欲求の実現を図ろうとする。これが作品シュテラにおいて、ツェツィーリエに、あの解決の仕方を編み出させ、フェルナンドに、彼女の申出を受け入れさせた、作者の内的契機ではなかったのかと私は思う。

Über Goethes „Stella“

Naganuma Toshio

Im fünften Akt hat sich Cäciliens Haltung gegen Fernando

verändert, wodurch die Knoten in diesem Drama scheinbar gelöst sind. Die neue Denkart Cäciliens besteht darin, daß sie die Unbeständigkeit Fernandos dulden will. Und dann braucht Fernando keine Schuld daran mehr zu tragen.

Dieses Drama wurde im Jahre 1775 geschrieben. Damals war Goethe einerseits mit seinen Freunden befreundet, anderseits aber trachtete er ganz egoistisch nach seinem eignen Glück. Aus diesem Lebensbewußtsein scheint Goethes „Stella“ entstanden zu sein.